

平成22年3月31日現在

研究種目：特定領域研究
研究期間：2005～2009
課題番号：17083024
研究課題名（和文） 日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究
研究課題名（英文） Research on the transmission of Chinese classical literature and its development in Japan

研究代表者
静永 健 (SHIZUNAGA TAKESHI)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：90274406

研究成果の概要（和文）：長い日本の歴史の中で、中国の古典とされる幾つもの文学作品が、何時、どのようにして渡って来たのか、そして、それらの影響が、日本の伝統文化が形作られる上で、どのような機能を果たしたのかについて研究した。古くは奈良時代に渡ってきた古写本の分析から、平安時代の宮廷文人たちの読書のようす、そして、中世から近世に至る識字階層の広がりの中で、中国古典文学と日本の文学作品、更には日本語そのものの発展の歴史を考察した。

研究成果の概要（英文）：In the long history of Japan, when and how came across a number of Chinese Classical literary works? In our research we considered the role these influences played in taking shape of the Japanese traditional culture. We analyzed old books that came to in the old times of the Nara Period and reading books of the Literary Court of the Heian Period. Then with the spreading of literacy among the broad masses beginning from Middle Ages to the modern times we observed Classical Chinese literature and Japanese literature works, and furthermore the development history of Japanese language itself.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	6,800,000	0	6,800,000
2006年度	6,800,000	0	6,800,000
2007年度	6,800,000	0	6,800,000
2008年度	6,800,000	0	6,800,000
2009年度	6,800,000	0	6,800,000
総計	34,000,000	0	34,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学／各国文学・文学論

キーワード：中国古典 正倉院 文選 白氏文集 古文真宝 明治漢詩文 域外漢籍

1. 研究開始当初の背景

この研究開始当初のこの分野に関する学界の状況は、おおよそ以下の四項目に概括で

きる。

(1)【日本伝統文化形成の中で、中国古典文学はどのような役割を果たしたのか?】

従来の日本学研究は、特に日本国内においては、我が国の独自性の解明に重点が置かれていたために、中国や朝鮮半島、更には中世後期以降のヨーロッパとの関連性、関係性について、考察が向けられることが少なかった。すなわち、それらはおしなべて「外来文化」という視点でとらえられ、その影響の多寡のみが話題となってきたように思われるのである。しかし、特に中国の古典文学においては、単に「影響」という単一的、一面的な視点では把握できない極めて複雑な問題がある。例えば、中国においては単に民間の娯楽文学に過ぎなかった説話文学が、朝鮮半島や日本においては、ナチュラルな口語（その当時の中国語会話）の指南書としての性格を帯びたり、宗教（主に仏教）と一体化することにより、民間における平易な教導書としての性格を有したりすることは、この問題を考える上で、等閑視できない現象である。しかし、これまでの状況として、日本学を専門とする研究者は、その視野を拡張、朝鮮半島や中国、そしてベトナムや東南アジア諸地域を含む広領域に進むことは難しく、そこには大きな障碍があった。

(2)【中国学の盲点であった和刻漢籍の研究】

同時にそれは、中国学を専門とする研究者にも同様の問題が存在した。研究代表者静永および研究分担者の幾人かが所属する日本中国学会では、かつて日本研究はタブー視される傾向にあった。研究対象とする古典籍も、中国の版本こそが正統なものであり、日本や朝鮮半島で出版された古版本（たとえば江戸時代の木版本）は、ややもすれば「読むに値しない」ような蔑視をうけてきた時期もあった。しかし今日、学界の認識が改まり、書誌学の研究こそが文学研究の最も基層を支えるという意見が公認されるに至って、江戸時代の版本をはじめとする日本の古書籍（和刻本）にもようやく研究の光が当てられるようになった。このことが、本研究課題が発足した最大の理由である。これまで和刻本による中国漢籍（また更に古くは写本）の研究は、日本の中国学研究者にとって、大きな盲点であったのである。

(3)【日本文化研究者と中国文化研究者の疎遠】

研究代表者静永はこれまで、日本における中国学および日本文学と中国文学との比較研究を主眼とする学会に幾つか所属してきた。しかし、それらの学会に参加して驚くことは、その幾つかの学会が、それぞれに全く没交渉であり、同じ日本国内の学会組織でありながら、ほとんど連携するところが無いことである。それぞれの学会は、時代（古代・中世・近世・近代）や文学ジャンル（詩歌・

散文・小説）によって細分化され、また、研究の主軸を中国に据えるグループと、日本に据えるグループとに截然と分かれているのである。私はこの状況を大いに憂える者である。これからは学際的な立場に立って、日本文化、そして東アジアの文化を捉え直し、全地球的な視野に立ってこれらを相対化することが求められているのである。

(4)【東アジア社会の中で、なぜ中国古典文学がこのように広範囲に伝播し得たのか？】

このことは、そもそも「漢字」を根幹とする中国の古典文学が、なぜこのように広範囲に伝播し、かつ、朝鮮半島や日本において、それぞれ独自の展開を見せていったのかという問題に繋がる。一国主義的な文学研究から脱却し、グローバルな視点から日本を、そしてアジアの文学を考えること、これが本研究課題の目指す目標であった。

2. 研究の目的

さきの四項目の「背景」に基づき、本研究課題には以下のような目的があった。

(1)【中国古典の伝来を視野に入れた日本文学史（文化史）の再構築】

明治期以来これまでに著述された「日本文学史」は、まさしく和文文学を中心とするものであって、中国古典の影響（たとえば源氏物語における『白氏文集』の影響）はその付帯事項として簡単に紹介されるに留まっていたように見受けられる。もちろん、日本漢文を中心とした「日本漢文学史」の著述も幾つか発表されているが、それらを融合し、また日本と中国、そして朝鮮半島との文化交流を視野に入れた日本文学史（および日本文化史）が必要である。

(2)【日本が誇る古写本（旧抄本）・古版本の把握と海外への紹介】

我が国には、正倉院や宮内庁書陵部、内閣文庫（国立公文書館）、名古屋蓬左文庫など、歴史的にも由緒ある古書籍のコレクションが多数存在する。また、近代以降には東洋文庫や静嘉堂文庫、天理大学図書館、斯道文庫など、東アジア屈指の古典籍収蔵機関がある。しかし、これらのコレクションの存在とその優れた価値は、研究者はまだしも、一般にはまだ十分認識されているとは言い難い状況にある。特に中国や朝鮮半島など海外の研究者においては、これらの紹介の機会は更に少ない。

(3)【各種学会との連携】

「日本中国学会」や「東方学会」、そして「中古文学会」や「和漢比較文学会」など、

幾つかの学会に所属する研究者が相互に連携し、特に日本と中国、韓国をグローバルに捉えた研究が行われるようになるためには、その紐帯となる活動が必要である。本課題研究はその発信源を目指した。

(4)【日本文学、そして東アジア文学の相対化】

もはや日本人のみによる、日本国内だけの日本文学研究ではあってはならない。同時に、中国文学研究においても、中国国内の歴史のみに依拠しては、その本質をつかむことはできない。日本文学（日本伝統文化）、そして中国文学（中国伝統文化）を全地球レベルで相対化する必要がある。

3. 研究の方法

本研究課題の活動は、以下の四つに分類できる。また、それぞれの活動の成果は、研究論文や著書としても発表されており、その詳細については以下の4項目に分けて述べることができる。

- * 日本における漢籍の伝来とその読書に関する研究会の開催。
- * 海外の関連する学会、および機関大学の訪問と講演。
- * 日本国内の学会での研究報告。
- * 本特定領域研究課題に参加した各種研究班との共同研究。

(1)【研究会の自主開催】

2006年7月29日（土）九州大学文学部において「日本人と漢籍—日中文化交流研究会」を開催した。研究代表者静永が司会し、研究分担者道坂が「『王勃集』をめぐる」と題して研究発表したほか、国内の数名の研究者を招いて研究発表をお願いした。その成果は、2006年11月発行の学術誌『アジア遊学』93号（勉誠出版）の特集「漢籍と日本人Ⅰ」に結実した（静永・道坂・副島をはじめとする17名の共同執筆）。また、この雑誌企画は予想以上の反響を呼び、2008年11月に再び『アジア遊学』116号の特集「漢籍と日本人Ⅱ」となった（同じく静永・道坂・副島をはじめとする15名の共同執筆）。奈良時代以来、日本人が漢籍をどのように受容したかたどる従来には無かった研究誌となった。また、我々の研究の開始と時を同じくして2005年に中国において発足した南京大学域外漢籍研究所との共同研究会も日本国内で実現した。2009年11月14日（土）同志社大学において開催した「東アジア漢籍交流シンポジウム in 京都—「域外漢籍」の研究価値を考える」である。当日は静永の司会によって進行し、研究分担者副島が「中国文章論の受容と和文規範意識の形成」と題して研究発表、ほかに国内外9名の研究者が登壇した。また

この研究会の予稿集は、全文を日本語と中国語の二言語対訳とし、中国語圏の研究者と日本語圏の研究者の相互交流にも便ならしめた。「域外漢籍研究」という研究課題とその名称は、中国においても未だ十分には受け容れられているものではないが、そのためには、必ずや我々日本研究者との共同研究が必要である。本研究会の開催は、それを大きく前進させる一歩となった。

(2)【海外講演】

この研究期間内、静永はつとめて海外の大学および学会の要請に応じ、日本に残る資料を用いての新しい中国古典文学研究の可能性を紹介した。2007年8月韓国ソウルの誠信女子大学で開催された韓国中国学会での講演（題目は「崔致遠《記徳詩三十首》中の唐末節度使高駘像」）。2008年11月北京の清華大学中文系での講演（題目は「古写本《白氏文集》と日本平安文人」）。2010年3月上海の復旦大学での連続講演（題目は「漢籍の日本初伝と馬の関係」「日本旧抄本《白氏文集》の校勘方法」）。また、これらの海外研究者との対話によって得られた知見は、静永の単著『漢籍伝来—白楽天の詩歌と日本』（2010.1 勉誠出版）として結実した。本書は、日本に中国の漢字文献がどのようにもたらされ、その後（中世まで）どのように展開されていったのかをさまざまなレベルで論証した本研究課題の主要な成果の一つである。

(3)【学会での研究報告】

2007年10月名古屋大学で開催された第59回日本中国学会では静永が「九世紀における杜甫詩集の伝播」を発表、2009年10月文教大学で開催された第61回日本中国学会では齋藤が「沈約「郊居賦」再探」を発表した。また海外の国際学会においても2009年4月中国古代文章学国際学術研討会（復旦大学）に副島が「江戸初期の中国文章論の受容とその展開」を発表した。

(4)【他研究班との共同研究】

本特定領域研究の「横のつながり」を確かなものにするため、さまざまな企画が展開されたが、静永は2007年7月、九州大学で本特定領域研究全体のワークショップを九州大学で開催した。また、その後、これらの活動によって得られた知見と人的ネットワークによって、共著書『から船往来—日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』（2009.6 中国書店）を主編したが、15名の執筆者からなる本書は、東アジアの中における日本の伝統文化を、これまでにない多種多様な切り口からアプローチしたものとなった。

4. 研究成果

本研究課題の目標は、日本における中国古典文学（漢籍）の伝来とそれ以降の日本文化の中での展開を探り、このことに関する指標を打ち立てることにあった。その最も中心となる成果は研究代表者静永が単著『漢籍伝来—白楽天の詩歌と日本』であるが、ここには従来の研究では必ずしも明確には指摘されていなかった以下の三つの新知見が提出された。

(1)日本に中国の漢字文献（文字だけでなく、読むモノとしての書籍）がはじめてやって来たのが、五世紀の初めであること、そしてそれがヤマト政権の王権の保障や、朝鮮半島との外交において必要であるばかりでなく、中国の伝統思想そのものの中にも、その要因が内在していることを論証した。

(2)奈良時代以降、大和朝廷の政策によって、中国の諸制度や科学技術が率先して導入されてゆき、それは文学の面にも顕著であるが、『竹取物語』や『源氏物語』、また和歌の伝統の中核部分にいきづく「雪月花」などの文化的精神の淵源は、九世紀の中国に活躍した詩人白居易（白楽天）の『白氏文集』にあることを従来の研究以上にさまざまな角度から明らかにした。

(3)そのように歴史的に密接な関係をもつ中国、朝鮮半島、そして日本の文学であるが、その文化の発展の方向性に大きな分かれ目が生じてきたのが、藤原定家などの鎌倉初期（十三世紀）であることを論証したが、その最も大きな原因は、三地域の書籍の伝播流通方式の違いにある。すなわち、宋代（特に南宋以降）木版印刷による書籍の流通を徐々に拡大していった中国と朝鮮半島に対し、日本では鎌倉時代以降から江戸時代中期頃に至るまで写本による書籍の流通が主流であった。この流通方式の違いは、単に外面的、数量的な差異を生じただけでなく、文学作品の読み方や、更には本文の文字異同のレベルにまでも大きな影響を与え、結果的に文化そのもののあり方にも大きな違いを育んでいったことを明らかにした。

また、各研究分担者の成果にも刮目すべき優れた成果が幾つも生み出されたが、ここでは特に次の二点を挙げておきたい。

(4)これまで歴史学や芸術学の分野における研究が主流であった正倉院伝来の古文獻について、文学研究においてもどのようなアプローチができるのか、そのモデルを作り、またその研究成果が、中国の文学研究にも大いに重要であることを証明した。

(5)従来截然と分かれて研究されていた「和文」の文学研究（および文章学研究）と「漢文（日本漢文）」の研究であるが、それらには従来密接な繋がりがあり、日本語の文章

（文体）の発展形成を正確に捉えるためには、例えば、近世の江戸や明治時代においても、両者を総合的、双方向的に分析する必要があることを論証した。

以上の研究成果は、単に日本の文学の研究だけでなく、中国や朝鮮半島を含めた東アジアの文学（さらには伝統文化全体）の研究にも有効な回答を示すものであり、更には、これら東アジアの伝統文化を相対化させ、全球規模の文学（文化）研究への発展を推進するものであり、日本国内の学界のみならず、海外の研究者にも大いに裨益する成果となった。静永の著作は出版後まだ数ヶ月しか経過していないが、既に海外（北京）での翻訳出版が決定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

① 静永健、高校生に薦めたい漢詩「原爆行」「水爆行」について、九州中国学会報、第 48 巻、査読有、2010、pp.92-107

② 静永健、東アジア共有文化としての「漢籍」、文学研究（九州大学大学院人文科学研究科）第 107 輯、査読無、2010、pp.17-31

③ 静永健、白楽天—仏教徒になれなかった詩人、中国—社会と文化、第 24 号、査読無、2009、pp.28-40

④ 副島一郎、南摩綱紀『環碧楼遺稿』散文之部訳注（二）「秋月子錫墓碑銘」、言語文化（同志社大学言語文化学会）、11-3、2009、pp.473-492

⑤ 副島一郎、日本江戸時代的中国文章論の接受及其展開、中華文史論叢、2009-4、2009、pp.215-243

⑥ 静永健、『文苑英華』所収の杜甫詩文について（一）、文学研究（九州大学大学院人文科学研究科）第 106 輯、査読無、2009、pp.1-12

⑦ 静永健、白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について、中国文学論集、第 37 号、査読有、2008、pp.1-15

⑧ 静永健、最初に漢籍を読んだ日本人—菟道稚郎子、アジア遊学、第 116 号、査読無、2008、pp.8-17

⑨ 道坂昭廣、王勃佚文中の女性を描く二篇の墓誌について、アジア遊学、第 116 号、査読無、2008、pp.18-26

⑩ 副島一郎、種子としての『古文真宝後集』—『奥の細道』冒頭の解釈をめぐる一、アジア遊学、第 116 号、査読無、2008、pp.82-91

⑪ 齋藤希史、思惟する主体—湯川秀樹と漢文脈、大航海、第 67 号、査読無、2008、pp.66-72

- ⑫ 齋藤希史、漢字圏としての東アジア、大航海、第 66 号、査読無、2008、pp.77-85
- ⑬ 副島一郎、南摩綱紀『環碧楼遺稿』散文之部訳注(一)、言語文化(同志社大学言語文化学会)、10-3、査読無、2008、pp.515-529
- ⑭ 道坂昭廣、北朝文学のための覚え書き—『隋書』『北史』に見える「書記」について、島大言語文化、第 24 号、査読無、2008、pp.13-27
- ⑮ 静永健、『竹取物語』は何処から来たか、アジア遊学、第 105 号、査読無、2007、pp.92-99
- ⑯ 静永健、日中古典文学の「国境」、アジア遊学、第 100 号、査読無、2007、pp.144-146
- ⑰ 静永健、平安文人たちと『白氏文集』、アジア遊学、第 93 号、査読無、2006、pp.57-67
- ⑱ 静永健、戦国武将と漢籍、アジア遊学、第 93 号、査読無、2006、pp.122-125
- ⑲ 道坂昭廣、テキストとしての正倉院蔵『王勃詩序』、アジア遊学、第 93 号、査読無、2006、pp.105-115
- ⑳ 副島一郎、新島襄の漢学修業時代、アジア遊学、第 93 号、査読無、2006、pp.191-202

[学会発表] (計 20 件)

- ① 静永健、日本旧抄本《白氏文集》校勘方法、復旦大学古籍整理研究所古文獻新視野系列講座、2010 年 3 月 12 日、中国・復旦大学
- ② 静永健、漢籍初伝日本与馬之淵源関係考、復旦大学中文系特別講演、2010 年 3 月 11 日、中国・復旦大学
- ③ 静永健、尊円法親王筆「長恨歌」の本文について、第 245 回中国文芸座談会、2010 年 1 月 30 日、九州大学
- ④ 副島一郎、中国文章論の受容と和文規範意識の形成、東アジア漢籍交流シンポジウム、2009 年 11 月 14 日、同志社大学
- ⑤ 副島一郎、范仲淹の学問及文教振興的道教因素、第 6 届中国宋代文学国際学術研討会、2009 年 10 月 23 日、中国・成都市
- ⑥ 齋藤希史、沈約「郊居賦」再探、日本中国学会、2009 年 10 月 10 日、文教大学
- ⑦ 静永健、日本宗像大社所蔵《阿弥陀經石》、中国江南地区文献集散与天一閣国際学術研討会、2009 年 7 月 23 日、中国・寧波市天一閣図書館
- ⑧ 副島一郎、江戸初期中国文章論の接受及其展開、中国古代文章学国際学術研討会、2009 年 4 月 26 日、中国・復旦大学
- ⑨ 静永健、古写本《白氏文集》与日本平安文人、清華大学中文系特別講演会、2008 年 11 月 20 日、北京・清華大学
- ⑩ 道坂昭廣、六朝詩について、古代日本形

成の特質解明の研究教育講演会、2008 年 8 月 9 日、奈良女子大学

- ⑪ 静永健、白楽天—仏教徒になれなかった詩人、中国社会文化学会、2008 年 7 月 6 日、東京大学
- ⑫ 静永健、近三十年中国の『白居易集』校注出版、第 2 回東アジアの中の白楽天シンポジウム、2007 年 11 月 17 日、九州大学
- ⑬ 静永健、九世紀における杜甫詩集の伝播について、日本中国学会、2007 年 10 月 7 日、名古屋大学
- ⑭ 副島一郎、江戸時代の韓柳文を中心とした古文関係書の出版状況に就いて、古典文学班研究会、2007 年 9 月 22 日、同志社大学
- ⑮ 静永健、崔致遠《記徳詩三十首》中の唐末節度使高駢像、第 27 次中国学国際学術大会、2007 年 8 月 16 日、ソウル・誠信女子大校
- ⑯ 静永健、中国から『竹取物語』を読むと、にんぷろワークショップ 2007、2007 年 7 月 21 日、九州大学
- ⑰ 静永健、新羅文人崔致遠の詩文に見える唐末節度使高駢の実像、第 229 回中国文芸座談会、2007 年 4 月 28 日、九州大学
- ⑱ 道坂昭廣、『王勃集』をめぐる、日本人と漢籍：日中文化交流研究会、2006 年 7 月 29 日、九州大学
- ⑲ 静永健、十三世紀中国・高麗与日本日本的白氏文集、東アジア三国文化交流国際学術大会、2005 年 12 月 3 日、韓国・全北大学校
- ⑳ 静永健、十三世紀の『白氏文集』—藤原定家と李奎報、第 217 回中国文芸座談会、2005 年 7 月 16 日、九州大学

[図書] (計 15 件)

- ① 静永健、漢籍伝来—白楽天の詩歌と日本、2010、勉誠出版、306 頁
- ② ロバート・キャンベル、J ブンガク—英語で出会い、日本語を味わう名作 50、2010、東京大学出版会、242 頁
- ③ 道坂昭廣、正倉院蔵「王勃集序」校勘表、2009、本科研費報告書別刷、60 頁
- ④ 静永健、副島一郎(ほか 8 名共著、静永は 1 番目、副島は 6 番目)、東アジア漢籍交流シンポジウム in 京都予稿集—「域外漢籍」の研究価値を考える—、2009、本科研費報告書別刷、85 頁
- ⑤ 静永健(ほか 14 名共著、静永は 8 番目)、から船往来—日本を育てたひと・ふね・まち・こころ、2009、中国書店、319 頁
- ⑥ 静永健、道坂昭廣、副島一郎(ほか 15 名共著、静永は 1 番目、道坂は 2 番目、副島は 9 番目)、漢籍と日本人 II、2008、勉誠出版(アジア遊学 116 号の特集企画)、152 頁
- ⑦ 齋藤希史、ロバート・キャンベル(ほか 7 名共著、齋藤は 7 番目、キャンベルは 8 番目)、古典日本語の世界—漢字がつくる日本、

2007、東京大学出版会、278 頁

⑧ 静永健、白居易写諷諭詩的前前後後、2007、北京・中華書局、265 頁

⑨ 齋藤希史、漢文脈と近代日本、2007、日本放送出版協会、235 頁

⑩ 静永健、道坂昭廣、副島一郎（ほか 14 名共著、静永は 1 番目、道坂は 3 番目、副島は 16 番目）、漢籍と日本人 I、2006、勉誠出版（アジア遊学 93 号の特集企画）、227 頁

⑪ ロバート・キャンベル（ほか 7 名共著、キャンベルは 1 番目）、近代文人のいとなみ、2006、淡交社、207 頁

⑫ 副島一郎、気与土風—唐宋古文の進程与背景、2005、上海古籍出版社、247 頁

⑬ 齋藤希史、ロバート・キャンベル（ほか 9 名共著、キャンベルは 10 番目、齋藤は 11 番目）、日本を意識する—東大駒場連続講義、2005、講談社、278 頁

⑭ 齋藤希史（ほか 9 名共著、齋藤は 5 番目）、漢字圏の近代—ことばと国家、2005、東京大学出版会、222 頁

⑮ 静永健（ほか 20 名共著、静永は 9 番目）、漢文教育の諸相—研究と教育の視座から、2005、大修館書店、454 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

静永 健 (SHIZUNAGA TAKESHI)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：90274406

(2)研究分担者

齋藤 希史 (SAITO MARESHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80235077

ロバート キャンベル (ROBERT CAMPBELL)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：850210844

道坂 昭廣 (MICHISAKA AKIHIRO)

京都大学・大学院人間環境学研究所・准教授

研究者番号：20209795

副島 一郎 (SOEJIMA ICHIRO)

同志社大学・言語文化教育研究センター・准教授

研究者番号：00288565